# 退任の弁に代えて

福原　淳

**平成十四年四月某日**

今年度最初の教授会があるため出校。午後二時より四号館の会議室で。新しいマネジメント学部や臨床心理学科の先生方と一緒で七十名くらいか。お互いの紹介。夕方からは志木のベルセゾンで懇親会。新任の先生方とも話し合える機会があった。跡見に新風が吹き込んだ感じ。

思えば私が本大学に赴任したのは昭和五十五年四月の事。すでに非常勤講師として長らく来ていたので、特別目新しい事はなかったが、それでも最初の教授会の時には緊張の極で、本館（一号館）の会議室を入ってすぐの席で新任紹介に与かったのをかすかに覚えている。会議の内容は、学長候補者選抜の規則に関するもの、その他であったと思うが、延々夕方遅くまでかかった。たまたま家族が留守だったので、最寄りの国立駅近くのうなぎ屋に寄り、夕食に鰻重を食べ、アルコールを入れて、ホッとしたのを思い出す。

**五月某日**

新学部創設記念式典が十一時から行われるので、会場の花蹊メモリアルホールへ。新学部の発足にふさわしく、真新しいホールで、学長の経過説明、来賓の挨拶など、女子大の新たなる船出を祝った。続いて体育館でパーティー。岡谷、山川の両先輩なども見えて、しばし歓談。一紫会の幹事諸姉とも会う。跡見に対する常日頃のご尽力に改めて感謝。

私が赴任した頃の跡見のキャンパス内には、本館の校舎と学生寮くらいで、体育館すらなかった。今こう

してキャンパス内を見渡すと、新館校舎はさることながら、桜をはじめ、庭の手入れなども行き届いて、女子大らしい雰囲気に溢れ、まさに隔世の感がある。定年までの一年を、新しい跡見と共に過ごし、跡見の将来をある程度見極めることができて良かったと思う。

**六月某日**

この三月に跡見を退任された美学美術史学科の山川淳次郎先生が、名誉教授の称号授与のために教授会の場に来られた。ご同慶の至りである。思えば、同氏からは随分とお世話になった。

私が本学に奉職したのも、彼の引きがあったからだが、実は彼とは大学から大学院を通じてほとんど一緒で、その頃からよく世話を受けた。彼は私より一つ年上であるが、すでに老成した感じで、下町育ちの子供っぽい私などの足元にも及ばない存在であった。東大の院生時代に、指導教授竹内敏雄先生の下で、我が国初の『美学事典』が編纂されたが、故あって原稿の遅れがちな私を常に力づけ、励ましてくれた。それ以来跡見時代を通じても、相談に乗ってもらうのはいつも私の方で、ずっと頭があがらないでいる。学生時代、浦和のお宅に伺って、地元名産のうなぎを御馳走になったことがある。一方、拙宅を訪ねてくれた時、家に招き入れずに、二人でそそくさと出て行ってしまったことで、後程母親から「折角来てくださったのに」と、ひどく叱られた記憶がある。あの時はごめんなさい。近々また双方好物のうなぎでも食べましょう。

**七月某日**

国文学科の元教授で、生協（大学生活協同組合）の理事長も長年務められた橋本研一先生の訃報を耳にし、驚く。定年退職されてから七、八年で、まだまだお元気と思っていたのだが。跡見に生協が出来たのは、私

がちょうど赴任した頃のことだったと思うが、先生は初代理事長として一方ならぬ情熱を傾けられ、生協発展のために尽力された。その間私は数年間理事として協力し、その後も理事長職を引き継ぐ羽目になったので、とりわけ思い出が深い。先生は話し好きで、寡黙な私にご親族の話などをいつも楽しそうに聞かせてくださった。大学生協は学生や教職員の福利厚生を目指して運営されており、近所にこれといった店舗もない本大学にとっては、数々のニーズに応えてくれる、無くてはならぬ存在であり、学食と共に憩いの場でさえある。私も好んでその職に就いたわけではなく、書籍やCD等を安く購入できるので、多少ともバック・アップ出来ればと、ご依頼に応えてのことだった。亡き先生もきっと多くの先生が今後とも支えになってくださるのを願っていることだろう。

**八月某日**

立秋を過ぎたが、連日の猛暑。残暑どころではない。学務委員兼教務委員として、来年度の授業計画をそっくり抱え込んでしまったので、夏季休暇中なのに、おちおち休んでもいられない。ここのところ二、三日おきに大学にも出ている。電話も掛けまくった。しかし電話ではらちが明かない。休み中の先生に電話をかけるのは至難の業だ。仕方なく大学に行く。意外に相談したいと思う人に会えるのだ。それで一つ、一つ問題が解決されて行く。さらに学務委員長代行も仰せ付かったので、全体もまとめ上げなければならない。跡見最後の今年ぐらいゆったりとした気分で過ごしたかったのに、これでは楽しみにしていた旅行も無理だろう。大学が発展出来るかどうかの瀬戸際の時に、仕方がないか。

**九月某日**

私がゼミを持つようになった最初の卒業生（第十四期生）のゼミ会の知らせが届いた。場所はいつもの浜松町のビル地階のワイン・コーナー。もう何回続いているだろう。ゼミは十四名で構成されていたが、それなりの年齢に達しているし、生活状況もまちまちなので、やはり全員参加というわけには行かず、むしろ常連の集まりになっている。毎年のことなのでとは思うのだが、それでも皆学生時代に戻った気分で、屈託なく、飲み、食べ、よくしゃべる。先生がいないと成り立たないと言われて、忙しいのにもかかわらず、今年もつい参加の返事を出してしまう。そう言えば、私の前任校であるカトリック系の育英高専からも同窓会の誘いが来ており、参加するかどうか迷っている。

一方、私自身の学生時代のクラス会も毎年のように行われる。高校（都立の墨田川高校）も、大学（一～二年の教養学部時代で、担任が文化勲章受章者で国文学者の市古貞次先生）も、共に五月に行われるのが恒例だが、ここ三年ばかり多忙を理由に、どちらにも参加していない。その間、後者の会誌への投稿依頼もあったが、二、三年前にも趣味について書くよう頼まれ、無趣味な私には書きようがなく、自分の専門の音楽学と密接する、しかし趣味としか言いようのないレベルのピアノ演奏について、その悪戦苦闘振りを書いたことがあったので、今回はお断りした。そのうち暇ができたら是非出席してみたい。

**十月某日**

今日、授業で使ったヴィデオの中に、アメリカで活躍のヴィデオ・アート作家ナム・ジュン・パイク氏が映し出されて、思いを新たにした。彼は韓国出身で白南準といい、東大文学部美学美術史学科で私と席を並べていた。裕福な家庭の御曹司とかで、当時外国の高級車を乗り回しているという噂を耳にしたことがある。

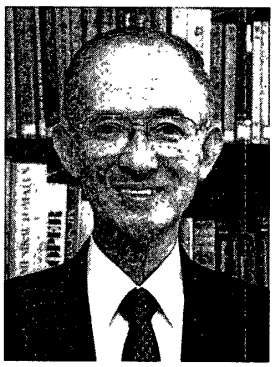
私とは恩師竹内先生の講義ノートなどを貸し合ったが（実はこちらから貸した記憶しか残っていないのだが）、彼は卒業後ヨーロッパを経てアメリカに渡り、一家を成した。ヴィデオに映し出された彼は、やや太りぎみで、私より老けて見え、最近体調を崩していると聞くが、元気に活動を続けてほしい。

**十一月某日**

午後九時半、三日にわたるゼミ旅行から帰宅。三年のゼミ生十二名を連れて目指したのは神戸。私にとって約十年ぶりの神戸は、震災の後にもかかわらず、今ではすっかり落ち着きを取り戻していて、一安心。到着日の夜は、音楽会に行き、モーツァルトの「交響曲第４０番」、「フィガロの結婚」序曲と、ヴィヴァルディの「四季」を鑑賞したが、古楽器による演奏と解説付きで結構面白かった。外の夜景がまた素晴らしかった。二日目の前半は異人館巡り。好天に恵まれ、神戸の秋の空気を満喫しながら、いくつかの館を回ったが、女性にはオランダ館が人気で、無料の民族衣装を着用してカメラに収まり、ご満悦だった。皆不思議なくらいよく似合って、可愛らしかった。午後やや遅くなって美術館訪問。「ヴェルサイユ展」を観て、泰西の名品を堪能した。夜はゼミ・コンパ。三宮のとある店に集まり、二日間の反省と共に、これまで日程が無事こなせたことを喜び合い、乾杯。二時間ほど楽しんでホテルに戻る。さすがに疲れて、日にちが変わらないうちに就寝。今日の第三日目は十時半にホテルをチェック・アウト、神戸を後に大阪へ。しばらく道頓堀周辺を歩き回る。タコ焼きなどをしっかり食べて、関西の気分を味わう。夕方関西空港へ。七時半羽田着。解散。皆満足しながら無事東京に着くことができた。

## 十二月某日

私の満七十歳の誕生日。昭和七年（一九三二年）、千葉県市川市に生まれてから、十分の七世紀が過ぎた。今更嬉しいわけもないが、家族が祝ってくれるというので、立川のデパート内のKというレストランへ。ささやかなプレゼントももらった。大学の紀要に載せる小文『ベートーヴェンのピアノ・ソナタにおけるソナタ形式楽章〝終結部分〟の様態』の執筆の後も、別の仕事に押され気味で、くつろぐ暇もなかったので、久しぶりにワインに酔った。成長期にろくなものも食べられなかった昭和一桁の人間にとって、よくぞここまで生きて来られたと思うが、〝古希〟といっても、現今ではまれでも何でもない。あと三カ月余りで定年退職となる身、それなりにいろいろな思いがある。もっと働きたいとも思うが、この辺が潮時かとも感じる。やり残したことが多々あるが、今までとは違った世界にも踏み込んでみたい。複雑な気持ちだ。それにしても、跡見は良かったという思いだけは確かだ。周りの教職員は皆さん親切だし、学生も大方は無邪気で善良そのものだし。



（付記）請われるままに、退任の弁にかわるものを一筆書き記した。苦渋の末、今年度の日記をもとに書き加えをして間に合わせたが、お目障りの節は何卒ご容赦を。